

## 漱石における自然

立川, 昭二郎  
修道短期大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12342>

---

出版情報 : 語文研究. 9, pp. 53-62, 1959-09-30. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 漱石における自然

立川 昭二郎

漱石と自然との組合せはある意味においてはまことに自然なこと  
のようである。我々は漱石の俳諧や漢詩や水彩画や「低徊趣味」  
「非人情」の世界を知っている。そしてこれらに晩年の所謂「則天  
去私」を考え合わせると、更に漱石の自然への思慕は動かしがたいも  
のとなるようである。

山路を登りながら、かう考へた。智に働けば角が立つ。情に棹さ  
せば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。  
住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越し  
ても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、画が出来る。

という「草枕」冒頭の各文章は文句なしに我々を自然の中に引き  
入れる力をもつているし、漱石の自然への親愛を彼の作品のなかか  
ら摘出することはさして困難なことではない。この「草枕」第十二  
の挿話がそうである。<sup>(註一)</sup>

「思ひ出す事など」で「南画」の前で「独り躑躅まっつて、默然と時

を過」している子供漱石の姿は異常でさえある。同じく「思ひ出す  
事など」の次の話も又そうである。

或時、青くて丸い山を向ふに控えた、又的皜と春に照る梅を庭に  
植へた、又柴門の真前を流れる小河を、垣に沿ふて緩く繞らした、  
家を見て——無論面絹の上——何うか生涯に一遍で好いから斯ん  
な所に住んで見たいと、傍にゐる友人に語つた。友人は余の真面目  
な顔をしげしげ眺めて、君こんな所に住むと、どの位不便なものだ  
か知つてゐるかと左も氣の毒さうに云つた。此友人は岩手のもので  
あつた。余は成程と始めて自分の迂濶を愧づると共に、余の風流心  
に泥を塗つた友人の實際的なのを悪んだ。

明治二十二年の「木屑録」はより一層漱石の自然への愛を語つて  
くれる。巻後の詩を引用しておこう。

白眼甘期興世疎 狂愚亦懶買齋響、為譏時輩背時勢、欲罵古人讀  
古書、才似老鷲且駮

識如秋蛻薄兼虛、唯贏一片烟霞癖、品水評山臥草廬

そして更に我々は二十七才の彼に「英國詩人の天地山川に対する観念」という論文のあることも知っている。

このように漱石の自然への思慕は生理的なものであり、生来のものであったと一応判断しても間違ひではなさそうである。「草枕」から「則天去私」への道を延長して行った時、自然が漱石の作品の底を常に流れていると我々は考えることが出来るようである。しかし「草枕」における自然は所謂「低徊趣味」の世界「非人情」の芸術、彼自身の言葉で云えば「閑文字」のなかでの逍遙であり、「則天去私」における自然は彼が人間のエゴイズムの追求の果てに、最後に辿りついた倫理的苦斗の彼方に見え始めた自然であるという、両者の自然の違い、あるいは深まりは通説通り一応考慮に入れておく必要がある。漱石は「草枕」以後二度と再び「草枕」的な作品は書かなかつた。それは「草枕」を境として漱石の文学態度に大きな変化があつたからである。現実に対する反応の仕方変化であると言つてもいい。「草枕」の頃の自然への憧れは、自分が「変物」であることを意識し、生活のなかでの人間関係——特に肉身達との俗世間的な関係や、西欧文学の「刺戟」によつて俗悪な開化の社会を展開している日本の現実への観念的な嫌悪の情と深く関係している。こうしたなかでの鬱然とした彼の不満が、それ故に反撥的な「坊っちゃん」や「猫」を書かせ、彼のロマンチックな心情を刺戟して「草枕」を書かせたのであろう。

事実漱石はロンドンから帰朝してまもなく再び激しい神経衰弱にかかつてゐる。この事情は「漱石の思ひ出」や「道草」に描かれてお

り、彼は肉身のわずらわしさのなかで悩み続けているのである。

そして教師たらんか、文学者たらんかで真剣な迷いを始めるのもこの頃である。この二者択一の悩みは三十八年「猫」を発表した頃再び強くなり、四十年四月の朝日新聞入社まで続くのである。又彼の「文学論」は「英文学に欺かれたるが如き不安の念」を抱いていた漱石の英文学へのデスマレイトな対決であつた。このような環境におかれた漱石が「猫」や「坊っちゃん」を書き、「草枕」や「淺虚集」の諸作品の世界を自己のなかに構成したのは当然であつた。

だが、ここで我々はもう一度漱石の「草枕」的世界の自然について考えてみる必要がある。我々はこの自然への思慕の背後に作者の痛切な孤独を見ることが出来ないであろうか。一人黙然として南面に見入る幼き漱石の姿は、彼の一生を通じての孤独を象徴しているように私には思われるのである。「画絹の上」に描いた自分の真面目な空想が、いかにも間のびのした迂闊なものであることを友達から指摘された時、その友人を「余の風流心に泥を塗つた」「實際的な人間として憎まずにはおれなかつた漱石にとつては、自然への愛は他人の介人を許さないほどの切実なものであつた。あの「草枕」冒頭の名文章は、寺田透氏も指摘するようにまことに確信に満ちた断定的な文章である。だがこの断定的な文章は「それから」以後のあの懷疑に満ちた「流血淋漓」たる漱石の苦悩と一体どうつながるのであろうか。この確信に満ちた、一段高い所から世間を見下しているような文体を作つた作者の心の裏側には、生の限りない嫌悪からの脱出という希求がぬりこめられてゐるのではないだろうか。自己を「変物」として意識し、厭世主義的な考えをもちそして参

禅し孤独のなかに自分を見出した漱石については、小宮氏がその「夏目漱石」のなかでくわしく述べているが、小宮氏は明治三十七・八年頃書かれたと思われる “Oh! Sorrow, ever falling yet ever present.” で始まる英文の断片の一文を引用した後、次のように云っている。

「漱石には周囲の者から自分の上にかげられる技巧の畧が、不愉快で堪らなかつた。自分の言ふ通りに言動しない、妻も子も親類も、不愉快で堪らなかつた。漱石は一切のものを失つても、この十重二十重に開まれた蜘蛛の糸のやうな、私の多い人情の世界を踏み破つて、自分の意志を貫ぬき通さうとする。——然も我我は、さういふ言葉の奥に、漱石の悲鳴のやうなものの響き出てゐることを、感じないわけに行かない。実は漱石は淋しいのである。淋しいからじりじりするのである。」

同じ三十七、八年頃書かれたと思われる次の漱石の英詩には、彼の「濛虚集」の諸作品に通じるロマンチックな抒情と共に、覆い得ない孤独感がひめられている。

In sorrow She ate her heart

—Her sorrow was too big for words

In silence She walked to the grave,

Not relieved even by a tear.

The word was hard on her while she lived,

For, they say, she died young and fair.

She knew no love except her mother's,

And left no mourners when she died.

Full many a time, the pale moon grew

And waned o'er solitary grave.

こう考えて来ると漱石の自然と孤独感とはその表裏を形成しているものであり、彼の自然への傾倒の裏面には我々は必ず彼の孤独を見ることが出来るのである。そればかりでなくこの両者は常に密接な關係を保ちながら「眞美人草」以後の作品を深めてゆくのである。それでは「草枕」以降の作品では自然はどのように扱われているであろうか。

「草枕」を脱稿した漱石は三十九年十月二十六日、鈴木三重吉にあてて手紙を書き送った。

只一つ君に教訓したき事がある。是は僕から教へてもらつて決して損のない事である。

僕は小供のうちから青年になる迄世の中は結構なものと思つてゐた。旨いものが食へると思つてゐた。綺麗な着物が着られると思つてゐた。詩的に生活が出来てうつくしい細君がもて。うつくしい家庭が（出）来ると思つてゐた。

もし出来なければどうかして得たいと思つてゐた。換言すれば是等の反対を出来る丈避け様としてゐた。然る所世の中に居るうちはどこをどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く反対の現象でうづまつてゐる。

そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、イヤなものでも一切避けぬ否進んで其内へ飛び込まなければ何にも出来ぬといふ事である。

只きれいにうつくしく暮らす即ち詩人的にくらすといふ事は生活

の意義の何分の一か知らぬが矢張り極めて僅かな部分かと思ふ。で草枕の様な主人公ではないけない。あれもいゝが矢張今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。

：（中略）：僕は一面に於て俳諧文学に入ると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい。

これは勿論漱石自身の反省である。彼がこの時志向したものは、詩的なきれいごとの文学でなく「生活の意義」を切実に内包した文学であつた。ということは「草枕」の自然への訣別であつた。漱石は「虞美人草」以後の作品においてもっとつきつめた姿勢で「生活の意義」を追求し始める。従つて彼の孤独は作品のなかで現実的な色彩を強め、心理的に究明されて来るようになる。

漱石は「虞美人草」に次のようなセオリーをつけ加えた。

道義に重きを置かざる万人は、道義を犠牲にしてあらゆる喜劇を演じて得意である。巫山戯る。騒ぐ。欺く。嘲弄する。馬鹿にする。踏む。蹴る。——悉く万人が喜劇より受くる快樂である。此快樂は生に向つて進むに従つて分化発展するが故に——此快樂は道義を犠牲にして始めて享受し得るが故に——喜劇の進歩は停止する所を知らずして、道義の觀念は日を追ふて下る。

道義の觀念が極度に衰へて、生を欲する万人の社会を満足に維持しがたき時、悲劇は突然として起る。是に於て万人の眼は悉く自己の出发点に向ふ。始めて生の隣に死が住む事を知る。妄りに躍り狂ふとき、人をして生の境を踏み外して、死の園内に入らしむる事を

知る。人もわれも尤も忌み嫌へる死は、遂に忘る可からざる永劫の陥穽なるを知る。陥穽の周圍に朽ちかゝる道義の繩は妄りに飛び超ゆべからざるを知る。繩は新たに張らねばならぬを知る。第二義以下の活動の無意味なる事を知る。而して始めて悲劇の偉大なるを悟る。：

漱石にとつて問題は実存的存在としての人間——即ち生か死かの第一義の場での人間認識であつた。ここでは彼の「草枕」の自然は姿を消してしまつてゐる。がしかし、この自然に代つて漱石の作品の中核となつたものは倫理的な第一義の生活である。「道義」である。自分の「仕事」が何か世間に必要なものでなければならぬ<sup>(注五)</sup>と考へていた漱石にとつて、「草枕」の世界にいつまでも追越することは許されなかつたのである。漱石は孤独の、あるいは神経衰弱の「対症療法」として「草枕」の世界に遊んだ。がしかしその孤独のために「己を曲」げることが出来なかつたのである。

ここで私は漱石のもつもう一つの面について述べなければならぬ。それらは彼の倫理性についてである。漱石の作品——特に「虞美人草」以後の作品には強いモラルトーンがあることには誰しも気付くことである。「坊つちやん」には素朴な精神の尊重、正義観正直の倫理が強く流れている。

漱石は生まれながらにして潔癖な倫理観と明晰な頭脳とを持った人間であつた。「道草」でお常のそらざらしい嘘をすつばぬいて「一徹な子供の正直」を披瀝した健三は、十一才にして「正成論」を書いた少年金之助であつた。それには「利ノ為メニ走ラズ害ノ為メニ通レズ膝ヲ汚吏貪士ノ前ニ屈セズ義ヲ踏ミテ死」した正成に対する熱烈な賛美がある。そしてこの少年漱石の姿は、後年「兄さん

は鋭敏な人です。美的にも倫理的にも、智的にも鋭敏過ぎて、つまり自分を苦しめに生れて来たやうな結果に陥つてゐます」と且さんから批評される「行人」の一郎であり、「私は倫理的に生れた男です。又倫理的に育てられた男です。」とその遺書に書き残した「ころ」の先生でもあった。

ではこのような漱石が「死ぬか、生きるか命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学」することを決意した時、——又それがいかに切実な孤独感を裏面にひめていたとしても「草枕」的自然から訣別した時、漱石の自然はどのような形で彼のなかに存在したであらうか。

「虞美人草」以後における漱石文学の問題は人間の持つエゴイズムの運命である。人間の愛の運命である。漱石にとってはこのエゴイズムと愛とは離れがたく結びついており、人間の罪を形成するものとして考えられている。更に問題を先に延ばして言うならば、この愛とエゴイズムとの悲劇的な結びつきに漱石の人間認識の重点がある。だがこれは漱石にとって消極的な人間認識となる。それは漱石の「無力観」<sup>(性)</sup>となる。この消極的な人間認識は人間相互の積極的なかわり合いの喪失を招来する。そして自然が漱石にとって意味を持ち始める。現実での交りの喪失は漱石の死への思考と深く関連する。死に傾斜した人間認識、ここに漱石文学の悲劇がある。漱石の悲劇は積極的な人間のかかわり合いを放棄したところにあるのだ。では何故そうであるのか。

「虞美人草」は前述のセオリーを説明するために書かれたものであった。そしてこのセオリーには、「道義」を中心において「生か死

か」という場での運命が問題にされている。この点において「虞美人草」はまさに漱石文学の出発であり、彼の人間認識の根本的な命題が提起されているのであるが、この作品の文体がそうであるように、饒舌な観念のいろどりは多彩であつても、人間実存の内面の姿は意外なほど浅いのである。作中人物と作者自身との関係は切実な緊張感で結ばれてはいない。やがて展開されて来る彼の悲劇的な文学の様相を予想することは出来たにしても、その実体にふれることは出来ない。次の「三四郎」は、その中心は三四郎と美禰子との関係に置かれており、美禰子の「無意識の偽善者」<sup>アンコンシャス・ヒポクリット</sup>も男女二人の関係という形では問題の起りようがなく不発に終っている。ただ結婚のきまった美禰子が、自分を追つかけて教会に来た三四郎に、別れ際「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり」というダビテの句を「聞き取れない位」の声でつぶやく処に、漱石の問題のプロローグとしての意味を認めることが出来る。「それから」以後の漱石の主要テーマである、愛を通しての人間実存にかかわる罪の意識がこの言葉で暗示されているのである。

「それから」は愛とエゴイズムとの結びつきが、実は愛の勝利でなく反対に愛の破綻をもたらすものであるということにテーマが置かれている。この作品で始めて漱石の真の問題が展開する。だからこの作品で漱石が始めて人間の心理の内奥に密着して作中人物を造型したということは重要なことである。主人公代助は作者と血肉を分ち合つた人間として登場する。その代助が彼の友人平岡からその妻三千代を奪回することを決意した時——これは人間関係における危機である——代助は人間を超えた人間の運命に逢着する。この時の代

助の危機は次のような形で提出される。

代助は「自分と三千代との關係を、直線的に自然の命ずる通り発展させるか、又は全然其反對に出で、何も知らぬ昔に返るか」(傍点筆者)と考えるのである。ここにははっきりした形で自然が登場して来るのであるが、この代助の自然とは如何なるものであろうか。代助は三千代を愛している。平岡よりも愛していると彼は思っている。いや代助は三千代が平岡と結婚する以前から三千代を愛していたのである。だからその愛している人間が三千代を要求するのは当然であり、自然な姿だというのである。だがその三千代を代助は「義侠心」故に「自然を輕蔑し過ぎ」た結果平岡に譲つたのである。今にして代助は彼の自然から復讐されるのだ。

四十二年三月六日、漱石は日記に森田草平の「煤烟」についての批評を書きしるしている。

煤烟は劇烈なり。然し尤もと思ふ所なし。この男とこの女のパッションは普通の人間の胸のうちに呼応する声を見出しがたし。たゞ此男と此女が丸で普通の人を遠ざかる故に吾々は好奇心を以て眺むなり。しかも其好奇心のうちには一種の気の毒な感あり。彼等が入らざるパッションを燃やして、本気で狂気じみた芝居をしてゐるのを気の毒に思ふなり。行雲流水、自然本能の発動はこんなものではない。此男と此女は世紀末の人工的パッションの為に囚はれて、しかも、それに得意なり。それが自然の極端と思へり。だから気の毒である。神聖の愛は文字を離れ言説を離る。ハイカラにして能く味はひ得んや。

これには漱石の考える自然の概念が割合にはっきりと現われてい

る。即ちここでは「自然本能の発動は「行雲流水」と同じ次元で扱われており、更にこれは「文字を離れ言説を離れた「神聖の愛」につながるものであった。即ち「自然本能」はその背後に「神聖の愛」を予定するものである。がしかし大切なことはこれは漱石にとつては理想的な観念にすぎなかったということである。我々は彼の作品にこの「神聖の愛」を具現した人物を見出すことは出来ない。「明暗」でそうした人間を——(清子が考えられる)——創造しようとしてみたのか知れないが、あくまでも臆測であるにすぎない。現実、代助の愛はそのようなものではない。

「今日始めて自然の昔に帰るんだ」と胸の中で云つた。斯う云ひ得た時、彼は年頃のない安慰を総身に覺えた。何故もつと早く帰る事が出来なかつたのかと思つた。始から何故自然に抵抗したのかと思つた。彼は雨の中に、百合の中に、再現の昔のなかに、純一無難に平和な生命を見出した。其生命の裏にも表にも、慾得はなかつた、利害はなかつた、自己を圧迫する道徳はなかつた。雲の様な自由と、水の如き自然とがあつた。さうして凡てが幸であつた。だから凡てが美しかつた。

この代助の感慨は一見「神聖の愛」を予想させる。しかし、やがて代助は「夢から覚め」ねばならないのである。「此一刻の幸から生ずる永久の苦痛が其時卒然として、代助の頭を冒して来」るのを感じなければならぬのである。所詮、代助にとつてこの「幸」は一瞬の夢にしか過ぎなかつた。そしてこのことは誰よりも漱石自身を知っていたのである。

それにしても漱石が人間關係の背後に、より高いものとして自然

を想定したことに間違ひはない。そして彼の自然は矢張り極めて東洋的なものを内包するものであった。「則天去私」的な世界につながつて行く性質のものである。この「行雲流水」に類した言葉で漱石は屢々使っている。例えば「門」の宗助が「風碧落を吹いて浮雲尽き、月東山に上つて玉一団」をかつて自分の心打つた言葉としてあげているのも同様な心境からである。

が、それはともかく代助は現実において、みじめな人間関係のなかで呻吟しなければならぬ。二人の愛は「人の掟に背く恋」として破綻を覚悟しなければならぬのである。

「三四郎」それから」と共に三部作をなす「門」は、従つて「それから」の延長である。「門」の宗助とお米は結婚後の代助と三千代である。「社会の掟に背いた宗助とお米には暗い罪の意識が執拗につきまわる。世間に対してこの二人は目陰者であった。彼等「二人は自己の心のある部分に、人に見えない結核性の恐ろしいものが潜んでゐるのを、仄かに自覚しながら、わざと知らぬ顔に互と向き合つて年を過す」さねはならなかつた。ここでは愛の破綻は人間相互のかわり合いの喪失となつた。それは二人をめぐる他の人達との関係においてはかりではない、この二人の間においてさへ、彼等は孤独であつた。同じ運命のもとに置かれてゐる二人であるにも拘らず、宗助とお米はその与えられた運命を思い思ひの姿勢で受けとつてゐるのであるのだ。二人の間に交される会話はこの関係をよく我々に知らせてくれる。

「御米、御前信仰の心が起つた事があるかい」と或時宗助が御米に聞いた、御米は、たゞ、「あるわ」と答へた丈で、すぐ

「貴方は」と聞き返した。

宗助は薄笑ひをしたが、何とも答へなかつた。其代り推して、御米の信仰に就いて、詳しい質問も掛けなかつた。

「道義上切り離す事の出来ない一つの有機体になつて」ゐる二人にとつて、この危機を切り抜ける唯一の方法は積極的な交りの回復しかない筈である。だが、この二人は「只自然の恵から来る月日と云ふ緩和剤の力丈」に頼つて生きるのである。宗助は參禪する、しかし失敗した。

「それから」以後の漱石の小説は、常に主人公の心理の描写に重点がおかれて物語が展開する。人間と人間との間に起る人間相互の相剋に視点を置き、その争いを通して、性格が発展し、現実が創造されてゆくというよりも、即ち、その関係のありかたと展開よりも、消極的な関係のなかでの主人公の心理の屈折の方に作者の視点はかたむいてゐるのである。そこで一番問題にされているのは主人公のこのころのあり方なのである。いいかえれば漱石にとつて社会的現実は彼自身の姿をうつし出すための鏡としてしか作用していないのである。現実を、対人関係の積極的なかかわりあいではなく、即ち人間相互の相剋を通して変革して行こうというのではなく、現実は主人公達の内面の世界に沈潜してしまふのである。こうした彼の創作方法にも人間の交りの喪失がある。

かくして漱石はこの交りの喪失のなかに人間のエゴイズムを見入る。「結核性の恐ろしいもの」とはエゴイズムに外ならない。そしてこのエゴイズムがきびしい倫理性のもとに「彼岸過迄」「行人」「てゝろ」で追求されて来るのである。それではこの漱石のエゴイズム



の追求の彼にあつたものは何であろうか。ここで私は問題をはつきりすすために「こころ」を通してこの問題を考察してみよう。

漱石は「こころ」でその主人公である先生を死に至らしめた。先生を死に追いやったものは人間の持つエゴイズムであつた。エゴイズムの結果としての人間不信であつた。一人の女を中に置いた争いで、先生は彼の友を裏切つた。その裏切りは先生には罪として意識された。「私はたゞ人間の罪といふものを深く感じたのです」と先生はその遺書に書き残した。これは痛烈な倫理である。それ故に先生は自殺した。だが、――漱石自身は死ななかつた。先生にとり残された漱石はいかにしてエゴイズムの問題を、そして死の問題を処理したのであるか。漱石は先生を自殺させた時、やはり自己の内面においてもエゴイズムや死の問題を、何等かの形で処理しなければならなかつた筈である。「死ぬか気が違ふか、夫でなければ宗教に入るか、僕の前途には此三つものしかない」という極限状況にまで追いつめられたのは「行人」の主人公一郎であつた。だが漱石は神を信じることの出来ない人であつた、又発狂もしなかつた。そして死ななかつた。

「こころ」を脱稿した漱石に顕著なことは死についての発言である。松浦嘉一氏の「木曜会の思ひ出」によると、大正三年十一月十二日、木曜会の席で漱石は次のように語つた。

死が僕の勝利だ。僕が死んだら葬式なんか、どうでもいゝよ。只みんな万才を称へて貰いたいね。何んとなれば死は僕にとりて一番目出度い、生の時に起つた、あらゆる幸福な事件よりも目出度いから。

このフィフ、人々が云々する理想とか、イズムとか、哲学とかい

ふものは死に比べたら、吹けば飛ぶやうなものだね、けれど死は絶対です。死ほど人間の掴み得るものの中で確かなものはない。

又、同じ年の十一月十四日に、彼は林原耕三にあてて、

拜復、私が生より死を扱ふといふのを二度もつゞけて聞かせる積ではなかつたけれどもつい時の拍子であんな事を云つたのです然しそれは嘘でも笑談でもない死んだら皆に柩の前で万才を唱へてもらひたいと本当に思つてゐる、私は意識が生ですべてであると考へるが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分はある。しかも本来の自分には死んで始めて還れるのだと考へてゐる。(傍点筆者)と書き送つた。ついでにもう一つあげれば、漱石は「硝子戸の中」で又も死についての問題をとりあげている。

不愉快に充ちた人生をとばし、辿りつゝある私は、自分の何時か一度到着しなければならぬ死といふ境地に就いて常に考へてゐる。さうして其死といふものを生よりは楽なものだとばかり信じてゐる。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊とい」

斯ういふ言葉が近頃では絶えず私の胸を往來するやうになつた。

然し現在の私は今までのあたりに生きてゐる。私の父母、私の祖母、私の曾祖父母、それから順次に溯ぼつて、百年、二百年、乃至千年万年の間に馴致された習慣を、私一代で解脫する事出来ないの、私は依然として此生に執着してゐるのである。

だから私の他に与へる助言は何うしても此生の許す範圍内に於てしなければ濟まない様に思ふ。何ういふ風に生きて行くかといふ狭

い区域のなかでばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向はなければならぬと思ふ。

これらを通して我々は漱石の死についての思索が何を意味するものであるかを、かなり明瞭に推察することが出来たのである。

「私は意識が生ですべてである」と考へるが同じ意識が私の全部とは思はない死んでも自分はある。しかも本来の自分には死んで始めて還れるのだと考へてゐる」というとき、これは自然への回帰である。

漱石には生死は「貫して把握するべきもの」として考へられてゐるのである。「生死ハ回避スベキ者」ではなく、「透脱スベキモノ」<sup>(注七)</sup>であつた。漱石の死の彼方には自然があるのである。エゴイズムとの闘争に疲れ果てた漱石は、「草枕」時代とは問題にならないほどの深さと切実さで自然を憧憬するのである。

大正三年三月二十九日、漱石は津田青楓にあてて手紙を次のように書き送つた。

私は馬鹿に生れたせむか世の中の人間がみんないやに見えます夫から下らない不愉快な事があると夫が五日も六日も不愉快で押しに行きます、丸で梅雨の天氣が暗れないのと同じ事です自分でも厭な性分だと思ひます、…(中略)…世の中にすきな人は段々なくなり、ますます、さうして天と地と草と木が美しく見えてきます、ことに此頃の春の光は甚だ好いのです、私は夫をたよりに生きてゐます。

漱石の自然の憧憬には依然として深い孤独がある。だがここで重要なことは、この孤独は「何ういふ風に生きて行くかといふ狭い区域のなかでばかり、私は人類の一人として他の人類の一人に向はなければならぬと思ふ」という人間関係に漱石をいざなうというこ

とである。ここでも「門」のところで述べたと同じように自我と他我(現実)とのかわり合ひは受身の形で自己の奥深く沈んでしまつてゐるのである。

かつては其人の膝の前に跪いたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせやうとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥げたいと思ふのです。私は今より一層淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないでせう。

これは「こころ」の先生の言葉である。ここには深い孤独がある。がしかし同時に、漱石は積極的な人間の交りを放棄してゐるのである。漱石の自然は彼に一時的な慰安を与へはしたが、実はもっと深い所で彼を孤立させたのである。漱石の「則天去私」は、彼の「神聖の愛」が観念の上における理想にすぎなかつたように、遂に永遠に到達することのない渴望の対象にしか過ぎなかつたように私には思われるのである。

漱石が「死ぬか、生きるか命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学」することを意志した時、それはまさに悲劇の文学への出発であつた。しかし漱石文学が今日の我々にとつて真に悲劇であるのは、彼がストイックなまぎびしい倫理意識のなかで、人間の愛やエゴイズムを追求したこと自体にあるのではなく、その追求の彼方に東洋的な無規定な自然を想定した所にあるのである。死に傾斜した、自然に傾斜した漱石の文学が、他我(現実)への積極的なかわり合ひの志向を持つことが出来ず、遂には人間の内面の

悲劇として終始しなければならなかつた処にこそ、我々は眞の悲劇の意味を求めべきである。

「自由との独立と己れとに充ちた現代に生れた我々は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はわなくてはならないのであるが、しかし人間がこの孤独から又死への思考から逃れるためには、積極的な他我とのかかわり合いを持たなければならぬのだ。エゴイズムの克服も、他我の変革と前進とを望むところに現実を動かすエネルギーとしての愛が存在するのだとすれば、現実社会へのアクティブな働きかけという形―新しい現実の創造という形においてしかあり得ないのではないだろうか。だとすれば、漱石の自然は人間と人間との創造的な交りを不毛に終らせた深淵であつたということになるのではないだろうか。死に向つて、――自然に向つて形成される倫理は、眞に現代のモラルとはなり得ないのである。」

(終)

一九五九、六、二十五、

註一 「小供のうち花の咲いた、葉のついた木瓜を切つて、面白く枝振を作つて筆架をこしらへた事がある。それへ二錢五厘の水筆を立てかけて、白い穂が花と葉の間から、隠見するのを机へ載せて楽んだ。其日は木瓜の筆加ばかり気にして寝た。あくる日、眼が覚めるや否や、飛び起きて机の前へ行つて見ると、花は萎へ葉は枯れて、白い穂丈が元の如く光つて居る。あんなに奇麗なものが、どうして、かう一晚のうちに、枯れるだろうと、その時は不審の念に堪へなかつた。」とある。

註二 談話筆記「処女作追懐談」の中で次のように書いている。  
「然しよく考へて見るに自分は何か趣味を持った職業に従事して見たい。それと同時にその仕事が何か世間に必要なものでなければならぬ。何故といふのに、困つたことには自分はどうも

変物である。(中略) 拙も一々此方から世の中に度を合せて行くことは出来ない。何か己を曲げずして趣味を持った、世の中に缺くべからざる仕事がありさうなものだ。」

註三 このあたりの事情は漱石が「文学論」を書いた経緯、特に「文学論」の序文によく記されている。

「余は少時好んで漢籍を学びたり。之を学ぶ事短かきにも聞らず文学は斯くの如き者なりとの定義を莫然と冥々裏に左国史漢より得たり。ひそかに思ふに英文学も亦かくの如きものなるべし、斯の如きものならば生涯を挙げて之を学ぶも、あながちに悔ゆることなかるべしと。……春秋は十を重ねて吾前にあり。学ぶに余暇なしとは云はず。学んで徹せざるを恨みとするのみ。卒業する余の脳裏には何となく英文学に欺かれたるが如き不安の念あり。……翻つて思ふに余は漢籍に於て左程根底ある学力あるにあらず、然も余は充分之を味ひ得るものと自信す。余が英語に於ける知識は無論深しと云ふ可からざるも漢籍に於けるそれに劣れりとは思はず。学力は同程度として好悪のかく迄に岐かるるは兩者の性質の其程に異なる為めならずんばあらず。換言すれば漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず。」

註四 「文学その内面と外面」(弘文堂)の中「漱石の文体」参照。

註五 註二と同じ。

註六 「夏日漱石に於ける二三の問題」片岡良一、「文学」第十八

巻第十一号参照。

註七 大正四年十一月頃の「断片」に「(8)生死ハ透腕マベキモノナリ回避マベキ者ニアラズ」と書いています。

― 修道短期大学助教授 ―